

名もなき毒

それは九月中旬にもかかわらず、日中の最高気温が三十三度に達した日のことだった。彼は午後四時前に家を出た。愛犬シロを連れていた。まだ幼犬のシロは残暑にもめげず、しきりと彼に散歩をせがんでいた。

シロの散歩には決まったコースがあった。自宅の玄関を出て路地を抜け、通りを右折してしばらく直進する。大きな交差点を二つ渡ると、右手に公園が見えてくる。犬を駆け回らせることは禁じられている公園だが、引き綱をつけた状態で通り抜けるだけなら咎められはしない。

公園の出入口は四方に開いている。彼は西口から入り、園内を反時計回りに歩いて北口から街路に抜けた。暑さのせいで、遊具を使う子供たちはいなかった。担当の清掃員が、東南の角にある公衆トイレの掃除をしていた。西側出入口脇の砂場のそばで、学校帰りの高校生カップルが、ベンチに座って話し込んでいた。

後日の聞き込みで、この学生カップルと清掃員は、小さな柴犬を連れた六十代後半の男性が、首にかけてタオルで顔の汗を拭いながら公園を通り抜けてゆくのを見たと言った。彼は柴犬に何か話しかけていたという。学生カップルは彼の声を耳にしたが、何をしゃべっていたのかまでは聞き取れなかった。清掃員は、彼が柴犬に向かって、

「暑いな。何でおまえはそんなに元気なんだ」

そうぼやいているのを聞いたという。

公園を通り抜けてからも散歩は続く。シロは電柱やガードレールにときどきマーキングをした。散歩のとき、彼は犬のフンを始末するために必要なビニール袋や小さなシャベル、手袋などの一式を、いつも持参していた。それらを安っぽい赤色のポシェットに入れて、肩から斜めに提げていた。

道筋の住人たちは、毎日決まったコースを周回する彼とシロの姿を、よく見かけていた。

「あのちっちゃい柴犬と、赤いカバンのおじいさん」

そんなふうに記憶している子供もいた。彼が通りかかったとき、たまたま外に出ていて顔を合わせれば、会釈を交わす程度の馴染みになっている主婦もいた。この夏は異常なほどの猛暑だったから、決まり文句のように、

「今日も暑いですねえ」

「暑いですなあ」

そんな会話を交わしたという八百屋の店主もいた。愛想のいい人でしたよ、という。

散歩コースの折り返し地点には、小さなコンビニエンス・ストアがあった。店ができたのは三年ほど前のことで、それ以前はコインパーキングになっていた場所だ。シロは折り返しの前にこのパーキングのメーターにマーキングする習慣があったから、コンビニができた後はしばらく、そわそわと落ち着かなかった。これは彼の娘が、彼から聞いた話である。娘はその時、シロがコンビニ店舗の前に出ているゴミ箱や、停めてある客の自転車にマーキングするようなことがあってはいけないと注意した。彼は、そんな心配はないと答えたそうだ。シロはバカじゃねえからな。駄目だと教えたら、やらないよ。

彼がコンビニに着いたとき、時刻は午後四時半を過ぎていた。往復で一時間の散歩コース、ちょうど半分だ。

そこがコインパーキングだったところは、コンクリートの車止めに腰かけて煙草を一服つけ、それから帰り道をたどったという。コンビニができて以降は、店に立ち寄ることもあれば、立ち寄らずに真つ直ぐ帰り道につくこともあった。その割合はせいぜい半々ぐらいのものだったそうだが、この夏はなにしろ過酷なまでに暑かったので、コンビニ店内に入って涼むことが多かった。そんな時はシロを店舗前のガードレールにつなぎ、安いものでも必ず何かひとつ商品を買って、金を払った。たいていは煙草だったが、十カ月と十日前に禁煙してからは、安価な菓子や清涼飲料水になった。

彼が煙草をやめたのは、今さら自分の健康状態に不安を覚えたからではなかった。十八の歳から喫ってきたのだ。それでも何の問題もなかった。

あるとき突然、ちっとも煙草が旨くないと感じたからだだった。口が不味い。苦い。だったらやめようと思い、思ったその日から、何の苦勞もなしに断つことができた。

「何でも潮時つてもんがあるってことだ」
笑ってそう言ったという。これも彼の娘から聞いた話だ。

その日、彼がコンビニで買ったのは、四角い紙パックに入ったウーロン茶だった。パックの横腹にストローが貼り付けてあるタイプのものだ。高血圧に効くらしいと、彼はよくウーロン茶を飲んだが、缶入りのものは嫌っていた。

コンビニを出ると、彼はシロを連れ、帰路をたどり始めた。行きと同じように、何事もなく歩いて家へ帰り着けるはずだった。

コンビニのレジで、彼は紙パックをビニール袋に入れようとした店員を制し、そのまま手に持って出て行った。これはレジを映している監視カメラの映像にも残っていた。

三十分歩いて、喉が渴いていたのだろう。最初から、持ち帰るのではなく途中で飲むつもりで買ったのだろう。

コンビニから大人の足で十分ほどの場所、彼の帰路の三分の一ぐらいのところに、自動車修理工場がある。間口三間はある大きな工場で、歩道に面した正面は常に開けっ放しだ。

この日、工場では六台の車を預かっていた。車の谷間に潜って働いていた三人の作業員は、最初、誰かが何かに驚いたかのような、「あつ」という叫び声を聞いた。それから猛然と犬が吠え始めた。一人は上半身を車の下に入れ、二人は前かがみになって作業していたが、とつさに、前の歩道で何かあったのだろうと身を起こした。

いちばん近いところにいた作業員が車のあいだをすり抜けて、正面に出た。
そこで彼を見つけた。

倒れていた。そして転げ回っていた。唸りながら口から白い泡を噴き、手足をばたばたさせていた。そのまわりを、小さな柴犬が吠え立てながらぐるぐる回っていた。

「うわ！ 何だこりゃ」

作業員は叫んだ。おい大変だ、救急車を呼べと、奥の事務室へ大声で呼びかけながら、作業員は彼のそばへ走り寄った。途端に柴犬が飛びかかってきて、袖に噛みつかれた。何とかもぎ離そうとしているあいだにも、倒れている男は歩道の上で悶絶している。白目を剥き出し、今や海老のように反り返って、背骨が折れてしまいそうだ。そこへもう一人の作業員が駆けつけ、犬を宥めて引き離し、首輪を押さえた。ようやく自由になった最初の作業員は、泡を噴いて苦しんでい

る男を抱き起こそうとした。

歩道でのたうちまわっていた彼は、そのとき絶命した。抱き上げた作業員は、末期の痙攣の波を、腕に感じた。それが今でも忘れられないという。悪夢のなかで再体験するという。

「何なんだよ、どうしたんだ？ 交通事故……じゃないよな？」

周囲にそんな様子はない。たった今死んだ男は一人きりで、その死に顔は穏やかには程遠く、苦悶に歪み、血走った目は飛び出しそうなほどに見開かれていた。

遅れて出てきた三人目の作業員が、目の前の光景の凄惨さにたじろぎ、よろめいた拍子に、歩道に落ちていたウーロン茶の紙パックを踏み潰した。ぐしゃつという音と共に、パックに残っていた中身が溢れ出て、歩道を濡らした。

柴犬は甲高い声で吠え続けている。作業員たちの声を聞きつけて、道沿いの住人たちが集まってきた。行き交う車が徐行し、運転者が窓からのぞく。

やがて救急車のサイレンが近づいてきた。

これが、午後四時四十分から、五十分ごろのあいだに発生した出来事である。到着した救急隊員が蘇生措置をほどこしたが空しく、彼の死亡が宣告されたのは、五時十二分のことだった。

犬を連れていつものように、小一時間の散歩に出ただけの彼は、身元を記したものを何も持っていなかった。ただ腰のベルトに、ケースに収めた携帯電話を着けていた。

事態に事件性を感じた救急隊員が警察に通報したので、この携帯電話の登録メモリから、「アキコ」という表示の番号を選び出し、そこに電話をかけたのは駆けつけた巡査の一人である。

電話を受けたのは、古屋暁子という四十二歳の女性だ。日本橋にある外資系証券会社トワメル・ライツ東京本部のセカンド・マネジメント担当で、この時はミーティング中だった。それでも電

話に出てくれたのは、着信画面の「父」の表示に、とっさに察知するものがあつたからだった。

彼女の父親は、よほど緊急の用がない限り、仕事中の娘に電話をかけたたりしない。

彼女に連絡がついたことで、彼の身元が判明した。古屋明俊、六十七歳。二年前、六十五歳の誕生日に、定年まで一途に奉職し、その後も週に三日嘱託勤務を続けていた大手金属加工会社を辞めたが故に、「無職」と呼ばれるようになったことに腹を立てていた老人だった。

誰が見ても異様な死だった。だから彼の死の現場で、すでにそれは囁かれていた。誰かが言い出し、人から人へ。

—— 四人目だ。

—— 四件目だね。

—— こんな近くで起こるなんて。

古屋明俊が、三月から首都圏で発生していた連続無差別毒殺事件の四人目の犠牲者の可能性がある、と報道されるのは、それから約三時間後のことになる。

紙パックのウーロン茶に混入されていたのは、今度もまた青酸性の毒物だった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。